

ボランティア体験学習の教育効果に関する研究

赤堀 方哉 (梅光学院大学女子短期大学部)

【序論】

日本のボランティア活動は低調であると言われ続けてきたが、1995年に起こった阪神大震災では多くのボランティアが現地に駆けつけ、ボランティアの存在が社会に広く知られるようになった。その後3ヶ月でのべ100万人を超える人たちがボランティアとして集まったと言われ、この年は「ボランティア元年」と名づけられた。このように近年のボランティアへの注目は、災害ボランティアへの注目として始まったが、今日では災害ボランティアにとどまるものではない。

そもそもボランティアとは、「自発性」、「社会性」、「無償性」を行動原則とする活動であり、その対象となる領域は福祉、環境、教育、子育て、まちづくりなど多岐にわたり、我々の生活の大部分と重なり合う。また、これらの活動は、「自由時間に行う活動」という意味ではまぎれもなく余暇であり、近年、「社会性余暇」として参加者を増やしている。

特に教育界ではボランティア活動を教育現場に取り込もうとする努力を続けている。中央教育審議会答申(1996)では、子どもたちの現状として、「社会性の不足や倫理観の問題」を挙げ、「今後における教育の在り方の基本的方向」を「生きる力」の育成であるとし、「豊かな人間性をはぐくむため教育的改善」の一つとして、教育現場におけるボランティア活動の積極的利用を提言した。それを受けて、1998年に告示された小・中学校の改定学習指導要領において、「ボランティア活動」の教育的意義が初めて明文化されるに至った。さらに、教育改革国民会議報告(2000)では「奉仕活動の義務化」が議論され、小中学校で2週間、満18歳未満の者には1年間の奉仕活動を義務付けることが提案され、大きな論議を巻き起こした。同答申によると、奉仕活動によって「公的な視野」や「思いやりの心」を育てることが可能であるとしている。一方、義務化への反対は、自発的な行為であるはずの奉仕活動を義務化することへの理念的な視点からのものと、「公」による「個」の抑圧という視点からのものが主流のようである。

教育現場におけるボランティア活動がめざすものとしては、様々なものが掲げられている。青少年問題審議会答申(1994)では、①自己実現、②社会的存在の確認、③主体性と創造性の開発、④社会意識の開発と国際人の養成、が挙げられている。また、中央教育審議会答申(1996)では、「豊かな人間性」の中身として、①正義感や公正さを重んじる心、②他人を思いやる心、③生命や人権を尊重する心、④美しいものに感動する心、⑤ボランティア精神、⑥人間関係の育成、⑦社会性、などが挙げられている。また、角田ら(2000)は、①共によりよく生きるという基本認識、②生活態度に学ぶという現実認識、③人間らしく生きるという人権意識、を挙げている。

このように様々な目標が掲げられているボランティア活動であるが、その教育効果に焦点を当てた実証的研究はほとんどなされていない。そのため、ボランティア活動は、「ボランティアをすれば、よい影響があるに違いない」という程度の認識にとどまっているという現状がある。そこで本研究においては、ボランティア体験がもたらした学習者の変容を通して、ボランティア体験学習の教育効果を明らかにすることを目的としている。

【研究方法】

1.調査対象

調査対象は山口県の B 大学の 1 年生 20 名である。彼女らは授業の一環として、2000 年 5 月から 2001 年 3 月にかけて毎週 1 日 (9:00~16:00、長期休業中は除く) のボランティア活動を行った。活動先の施設は、病院 (4 施設、8 名)、老人ホーム (2 施設、4 名) である。

2.調査方法

上記のボランティア参加者は、毎週のボランティア活動後にレポートを提出することになっている。そのレポートに示された内容を、共通したいくつかのカテゴリーに分類し、内容分析を行った。

【結果】

レポートに示された内容を、それぞれ一つの意味のまとまりが保持される単位に、分割した後、関連する意味・内容をもつカテゴリーごとに分類した。分類したカテゴリーは、①知的・技術的側面に関する体験・学習、②感情を伴う体験・学習、③ショック・気づき、の 3 項目である。

①知的・技術的側面に関する体験・学習

1) 仕事の体験

- ・ 食事介助が何とかできるようになった。
- ・ 高齢者の着替えを、おっかなびつくりしながら手伝った。
- ・ 車椅子の方のトイレ介助はとても大変だったが、なんとか一人で出来た。
- ・ 初めて人のツメを切ったときはどきどきしたが、今では慣れてきてスムーズに切れるようになった。

2) 仕事に関わる知識獲得

- ・ ご飯のかたさや、調理法が、個人によって異なっていた。
- ・ 糖尿病の人とその他の人では、コーヒーに入れる砂糖が違うことを知った。
- ・ 高齢者には、かなりぬるめの湯がちょうど良いらしい。
- ・ 指を動かす遊びを多く取り入れていれることは、リハビリにもなる。

3) 利用者に関わる知識の獲得

偏見の打破

- ・ 高齢者でも、和食より洋食を好む人が多いので驚いた。
- ・ 高齢者でも芸能界の話とかをする人がいて驚いた。
- ・ 反射神経がとてもよくて、98 歳とは思えない人に出会った。

特徴の理解

- ・ 私たちが普段は気にならないようなところでも、高齢者には気を使わないと、大事故につながる可能性があるということが分かった。
- ・ 高齢者の体を拭く時は、手際良さが大切。寒い思いをさせるとすぐに風邪をひいてしまう。
- ・ 痴呆の方は同じ内容を繰り返すものだを知った。

②感情を伴う体験・学習

1) 否定的感情

職員との関係に関わる否定的感情

- ・ 職員の方からうっとうしく思われているようで、おもしろくない。
- ・ 職員の方にやつあたりをされて、悔しい。
- ・ 「一人で考えて一人で行動しなさい」と怒られたが、技術も知識もない私が何もできるわけがないのに、悔しいし、腹が立った。
- ・ 婦長さんに、「あなた方の活動には、興味がないけどね」と言われて、自分たちが全て否定されたようでむかついた。

利用者との関係に関わる否定的感情

- ・ 老人と接したことがほとんどないので、とても不安だ。
- ・ 何を言っているかわからない人にはいつものことながら、困る。
- ・ すぐに身体に触れてくるのがいやだ。
- ・ ツメを切ってあげていると、「痛い」と言われた。自分から切って欲しいと言ったんだから我慢しろ。
- ・ お年寄りが嫌いになりそうだ。

仕事に関わる否定的感情

- ・ トイレ介助はしたくない。
- ・ 一人の老人を見ていて頼まれたが、何か起こったらどうしようとすごく不安だった。
- ・ 雑用をしていると、自分たちがここで何をしているかわからなくなった。
- ・ 自分のやっている仕事は何なのか全く理解できていないために、すごく居心地が悪い。

2) 肯定的感情

職員との関係に関する肯定的感情

- ・ 「雑用でも手伝ってくれるとすごく助かる」と言ってくれたので、うれしかった。
- ・ 職員の方に「あなたが一番、患者さんに近かったのよ」と言って貰えてうれしかった。

利用者との関係に関する肯定的感情

- ・ みんな歓迎してくれたのでうれしかった。
- ・ 合掌して「ありがとうございます」と言われたので、驚いてしまった。
- ・ 「こんな若い人に手伝ってもらえて、とてもうれしい」と言われたとき、泣きそうなくらいうれしかった。
- ・ 私を覚えてくれて、声をかけてくれることがうれしい。
- ・ 高齢者によく声をかけられるようになったのがうれしい。
- ・ 自分の悩み事をおばあちゃんに相談すると、真剣に聞いてくれたのでとてもうれしかった。聞いてくれるやさしさが、こころにしみた。
- ・ 家の人が持ってきてくれていたお菓子を、私のことを思い出して取っておいてくれたらしい。

仕事に関する肯定的感情

- ・ この施設での自分のやるべきことを一つ発見した。
- ・ 明確なすべき仕事があると安心できる。

自分に対する肯定的感情

- ・ 私でも人の役に立てるんだと思うと、すごくうれしくなってくる。

- ・話を聞くことくらいしかできない私があることをとても喜んで迎えてくれる。私も必要とされているんだと感じる。
- ・私の存在を見とめてくれる人がいること、私が少しでも役に立てることを知り、新たな気持ちでいっぱいだ。

③ショック・気づき

- ・言葉の不自由な患者さんに噛まれた。「何で噛むの?」と思ってばかりいたが、それがその人なりのコミュニケーションの仕方であり、表現の1つだったかもしれない。
- ・「自立させる」という目的を忘れ、自分に都合のいいように、手伝ってばかりいたことに気がついた。
- ・お世話するのが当たり前と思って接することが、お年寄りを傷つけている。
- ・1週間しか経っていないのに、症状ががらりと変わっているのに驚いた。高齢者は、体調を崩しただけで、こんなに変わってしまうんだ。
- ・ボランティアは施設の職員の下請けではなくて、独立した立場として協力して働くのだ、ということが分かり、自分の仕事にやりがいをもてるようになった。

【考察】

実習が始まった当初は否定的な感情を伴う経験が多い。それは仕事への不安・不満であり、対人関係への不安・恐怖である。仕事への不安は、施設によって異なりはするが様々な体験を積んで、高齢者に関する知識や又介護技術に関しては一様に身につけ、そのことに関しては大部分の者が満足している。

活動当初は対人関係に大きな不安・ストレスを感じていたようである。日常生活では、出会うことが少ない高齢者や特に痴呆の老人に対してはそれが大きい。施設の職員の方に対してもストレスを感じている。しかし、このボランティア体験を通じて、施設の利用者や職員からの些細な肯定的なフィードバックをもらうことによって、利用者から気づかれることを知るによって、そのストレスは軽減している。さらに、ストレスを軽減するだけでなく、自分のその場所での存在意義を見出し、自己肯定感を得、「生きる力」を得ることも可能である。

そして、その関係を基盤にして、より深い気づきが可能になったと思われる。すなわち、自分の行った介護が利用者にとどのような心理的影響を与えているのか、老いや死に関する頭での理解ではなく身体での理解、これらは実習を行った学生が利用者への向かって心が開かれているときにはじめて可能になるものである。

【参考・引用文献】

- ・中央教育審議会答申（1996）『21世紀を展望したわが国の教育の在り方について』。
- ・教育改革国民会議報告（2000）。
- ・文部省（1998）『中学校学習指導要領』。
- ・鳥居一頼（1999）『福祉教育のキーワードと指導のポイントーボランティア学習の世界によろこそ』、大阪ボランティア協会。
- ・角田禮三（2000）『ボランティア教育のすすめ』、明治図書。
- ・余暇開発センター（1999）『レジャー白書 '99』、文栄社。